翻訳

グスタフ・ルネ・ホッケ

ヨーロッパの日記

日記人間学 (四)

信岡資生訳

4 大いなる苦悩とささやかなるパラダイス

我等の可視的創造の第一車輪である人間、やはり車輪であるからには、選り抜きの実現の道で多くの障害に遭遇する！ こうしてこの「車輪」も、青年期と老年期を問わず、回避することのできない肉体的な衰弱、無常、心理的な惨めさ、病気、障害を体験する。そうなってこの「車輪」が、長短さまざまな目標へのコースの途中で道端に疲労して倒れ、あるいは休息を強いられるとき、矛盾に満ちた宿命の幻想が全く様変わりして訪れる。病気と老齢は冷酷な圧制者となり、同時に偉大、権力、幸福の幻像は後退して控え目となり、現世で味わうことのできる願望パラダイスはいっそう謙虚になっていく。日記の中で切に希求されるのは精神と魂の衛生だけではな

いことを確認すべきときが来た。精神が支配している、あるいは精神が萎縮している、果敢無い身体、病気と健康及びそれらと結び付いた幸福のイメージの慢性的減退、こうしたすべてのこともやはり同様にヨーロッパの日記の基本モチーフに入る。病気は自由な創造的発展の妨げとなるが、一方ではまた創造的強制をかけることにもなる。キルケゴールは日記の中で、自分に肉体的な支障がなかったなら、憂鬱に意味を付与することは出来なかったであろうと結論している。病気は日記作者にとっては、少なくともそれを治療する手段や、またその都度の治療結果と同じように記されねばならない出来事である。真の自己観察者は、ルソーが「機械」と呼ぶ身体に注意を払う。「両性類」であるが故に日記家は精神と生の緊張を回避したがるが、自分が精神とそして身体を持っているという事実は、日常の現実を通して否応なしに押しつけられる。ここでもまた「真の」日記と「彫琢された」日記とは区別されなければならない。率直で抑制を知らない日記作者は病気中の秘めた心理の暴露も敢えて恐れはしないであろう。逆に苦痛の金縛りになって、むしろ露出狂になりたい誘惑に駆られる。殊に公表が念頭になければ尚更である。いわゆる自然主義の小説の心理学的リアリズムが日記のジャンルで既に先取りされていると言ってもよいかもしれぬ。日記という私的な神殿の中で一切を話してしまいたいという欲望は、性（セックス）の領域ばかりか、その他もっと口にし難い生物学的事象にまで及んでいる。

一九世紀については、ルソーが「告白（コンフェッション）」の中に自己の恐るべき泌尿器系その他の障害についてあからさまに書いたことで、この点に関し極めて強力な駆動力を与えたことは疑いない。アミエルは自分の健康管理をまさしく祭司のように行っている。ジッドは恥じるところなく消化の作用と障害を記述し、その直後乙に澄ましてショパンのピアノ曲なんぞについて論じている。しかしながら既に敬虔主義のドイツの日記の中に全く奇妙、素

朴、且つセンチメンタリックにこのような性質の事柄が述べられていたのだった。これをヘルダーは周知の通り行き過ぎと見たのであるが。時代の精神からすればそれも「正常」であると見なさねばなるまい。パラダイス的な無垢と虚飾なき事実と万有への憧れ、善良なキリスト教的良心を自覚してすべてを語ることへの憧れであると。例えば疑いもなく聡明で世慣れた貴婦人であるアマーリエ・フォン・ガリツィン侯爵婦人は日記に、「私の肉体と心の状態の持続的観察！」について書いている。自分の身体を彼女は住居のようなものであると言い、自分の心の行動をいっそうよく診断することができるようにいっそう詳しく観察しなければならない、としている。それに加えて彼女は、自分の身体の構造は強く頑丈で、女性的というよりはむしろ男性的であると言い添える。胸、胃、頭は「それ自体強い」と言うのだが、この順序も注目に値する。しかしそれにもかかわらず、と侯爵婦人は続けて、自分は「殆ど常に病気がちである」。「その理由は主として下半身」にある、と書く。これが「私の心の中に憂鬱を生むが、それを私は神に寄せる堅い信頼によって辛うじて克服することを得ている。[1]」また彼女は、自分は「飲食欲」が「大へん旺盛」であることを歎いている。ヒポコンデリックな（憂鬱な）時に限って「甚だしく食物に」執着するので、神に対する心構えをより良いものに改めるためにしばらくの間黒パンと野菜のみを食べようと思う。[2]

しかしながら「身体の調子」の観察、病気の状態と健康の状態の間の心理学的変動、それに相応した魂の反応の観察は、既にもっと以前から現れる。これは本書のテーマ――ヨーロッパの日記学における連続する均質の人間性（フマニテート）――との関連で重要な事実である。我々はこれまでの記述の中で、ルネサンス以降の日記における主観的要素の増大が――このことははっきりさせたと思うが――いかに明白になったとは言え、人間が殆ど専ら自分自

身とのみ取り組んでいるような近代の日記にはまだお目にかからなかった。主として自分自身に注意の目を向け始めるようになった初期の日記帳の作者には既に言及しておいた。即ちフィレンツェの初期マニエリスムの巨匠ヤコポ・ダ・ポントルモのことである。ポントルモは、いわば継続的に自らこの一風変わった「日記（ディアリオ）」の中で自画像を描写した。とりわけ極めて写実的に自分の身体を、それもその生理学的機能を。食事と消化、病気と障害、食餌療法と病気予防措置がこの年老いていく変人ポントルモの日記では重要な役割を演じている。この天才的な、新しい反古典主義様式の告知者は、自己の「肉体（フェーズイス）」を殆ど顕微鏡的な鋭さで観察する。このことで、ルネサンスは「主体の独自性」を、新たな、今度は「否定的な」身体感情によっても発見するということ、そしてルネサンスがこの感情について熟考し始めるやいなや「マニエリスム的」になるということが裏付けられたとされてよい。ポントルモは自分自身を悩む主体としてというよりも苦痛に苦しめられる客体として描写する。しかしながらこの苦痛体験は——中世とは対照的に——いっそう鋭敏な自我感情に、いっそう自覚的な個性感覚に奉仕する。この種の意識の拡大は就中リアリズムの肖像画の技法、反古典主義的マニエリスム的「肖像画（リトラット）」[3]を発達させるが、このことについては更に説明することになるであろう。初期マニリストであるポントルモはまだ自身の身体の回りをめぐっているが、彼の恐ろしく冷静な、反文学の模範となるような日記の中に見られる憂鬱で暗い魂の対位旋律は聞き逃せない。自らの病軀の苦悩を通してポントルモは、フィレンツェのペストという恐ろしい体験から受けた衝撃もあって、古典的健康の理想的身体美を疑わしく感じたようである。自身の病弱な身体の観察が、ポントルモのような繊細で「土星人的（サトゥルスス）」な芸術家に影響を残さずにすむはずもない。彼の肖像画のメランコリックな容貌の中に肉体の苦悩体験が表れている。これは、既にポントルモの芸術を批判する初期擬古典主

義の批評家たちが「病的」と呼んだのは正しいが、評価を誤ったところのものである。

ポントルモは驚くばかり冷徹であるが人間的には真実である日記メモを六十歳の年に書いた。これはつまりルソーが「告白」を著したのとほぼ同じ年齢である。[4] 多くの他の日記作者――アミエルからヘッベルを経てジッドまで――と同様ポントルモも心気症（ヒポコンダー）患者である。彼は天候に大変敏感である。注目に値するのは星辰、特に月が身体の調子に与える影響についての彼の考察である。さすが土星人だけのことはある！[5] 老ポントルモは自然の力と威力を激しい不安を覚えながら感じるが、これに対して彼は衛生療法、病気予防措置をもって抵抗する。自我流に征服するつもりで彼は食べたものや消化の具合を逐一事細かに記す。[6] 彼はたいてい貧弱だった献立ばかりか、消化の産物まで描写する。しかしポントルモは、敬虔主義やロマン主義の時代と対照的に、これら人間の物質的側面について「両性類」としてあれこれ穿鑿して考え込むのではない。あとになってようやく 肉体的疾患の記述が心の苦痛の分析と一致するようになるのである。しかしながら注意深い読者なら、この面白味のまるでない日記の中に悲劇的な生の感情と強い運命意識のあるのに気付くであろう。骸骨のような硬張りと、心の奥の感情の乱れが混じり合い、同時代の針金塑像を思い起こさせる。破局のムードだ！ ポントルモの塗り描いた聖ロレンツォの教会内陣のテーマは世界の誕生、世界の終末、最後の審判であった。このフィレンツェの奇人画家は、アルノの町のペストを経験した後、この制作に[7]――日記にと同様――死の直前まで取り組んだ。この二つの遺作の中に死の予感が感じられないであろうか！ その上になお不断の克己の努力。聖ロレンツォの仕事についての度々の小さな走り書きが心を強く揺さぶる。自己の惨めさについての簡素な記録に添えて彼はそれらを、まるで唯一自然、唯一病弱を力強く克服するための魔法の印のように、不死を確実にするための個人的象形文字の

ように書き添える。

ポントルモの日記がその特異さにかけては当時比類のないものであったと思う人は、比較のため、医師であり数学者であり物理学者であり魔術師であったジェロラモ・カルダーノ（一五〇一―一五七六）の自叙伝、超個人主義的でもありまたマニエリスム的主観的でもある「デ・ヴィータ・プロプリア」[8]を手に取らなければならない。自己の身体の観察[9]のみならず、自己観察と反省もそこに見出される。それ故にヴィルヘルム・ディルタイは「ルネサンス及び宗教改革以後の世界観と人間の分析」についての研究の中で、この「常軌を逸した[10]」作品に、「矛盾だらけの魔神的（デモーニッシュ）な個性」の自己認識にとっても重要な意味を認めたのであった。カルダーノは「彼の個性の形成を決定した必然性」を示そうと企てた[11]。――とディルタイは書いている。つまりポントルモの時代に――ディルタイによれば――「伝記の課題の最高概念」、即ち「人間学的な」関係についての初めて異なった知識が生じるのである。更に加えてカルダーノは、まさに「古典的な」仮面をつけた小心者のヒステリックな挑戦的態度で自分のことに関し一切合財話す。自分の性欲について、自分のやったいかさまについて、自分の持っている復讐心について、自分の病気について、自分の考え方、感じ方、認識の仕方について、たいてい直観的に創造し形成するやり方について。ディルタイはドイツの「シュトゥルム・ウント・ドラング」を比較に持ち出す。「彼の異常な人格……己の特異性の予感と意識」が「一八世紀の独創的天才を想起させる[12]」。全く類似のことがヤコポ・ダ・ポントルモについても言えるであろう。

ポントルモに関し最後に、日記と新しい肖像画技法との関係についてなお一言。ポントルモは心理学的肖像画の巨匠であった。フィレンツェのマニリストたちはこの点に関しては――フォンテンブローを通して――フラン

スに影響を及ぼしたのであった。これらイタリアの巨匠に刺激されて、フランスの絵画は新しい人道主義的な、道徳心理学的な肖像画技法の最初の頂点に到達した。それはポルトレ文学で人物をしばしば言葉をあまり使わずに見事にスケッチして見せる名人芸の手腕に相応するものである。その好例はフランスの回想録、書簡集、小説、日記文学の中に無数に見られる。[13] モンテーニュは――想い起こせば――エッセイに書いた、「私が描きたいのは私なのだ」と。マルセル・プルーストの一大長編「失われた時を求めて」は、世界文学の最も意味深長な――人間存在の偉大と悲惨の間に挟まれた――自画像の一つとして現れる。また別の点から言ってもフィレンツェはこうした道徳心理学的な「肖像描き（ポルトレル）」の発祥地と見做されることができる。それも絵画彫刻の分野ばかりでなく文学の分野でも。有名人の文学的エッセイ風の描写であり肖像学（イコノグラフィー）であるパオロ・ジョヴィオの「ジョヴィオ博物館」は、一五四八年フィレンツェで初版が（版画のさし絵なしで）刊行された。その後一五四九年にリヨンで、一五五二年にパリで、一五七五年と一五七七年にバーゼルで刊行され、一六〇〇年頃にはその銅版画は全ヨーロッパで有名となった。[14] フランス王国アンリⅡ世の妃となったカトリーヌ・ド・メデシスはブロワに、一五八九年一月六日付のカタログによれば三四一点の肖像画のギャラリーを所有していた。一七世紀には「貴族（オム・ド・カリテ）」、「紳士（オネートム）」、バルタザール・グラシャンの意味のおける上品な社交界の紳士の理想像が成立する。この人間タイプは忘れられないで永遠化される必要がある。それは他でもない「肖像描き（ポルトレル）」の技法によってである。「誇るに足る自我」の意識と並んで、この時代にはまたパスカルの意味における「憎むに足る自我」の感情が形成される。ここでもまた即ち、人間偉大のビジョンに対し人間悲惨の現実が対比される。「盛装の肖像画（ポルトレ・ダパラ）」がやがて「本当の肖像画（ポルトレ・ド・ヴェリテ）」になる。これらの種々様々な影響に刺激されて、シャルル・ル・ブランは学士院（アカデミー）会議の骨

相学的習作を描く。[15] ヨーロッパの第一級の自己分析的日記作者の一人であるラーヴァーターは彼から決定的な影響を受けた。[16] 日記学の中で現実的な自己分析が発達したのと同じ起源から、人間の主観的な現実像が肖像画の技法の中でも発達する。ボードレールは書いている、「良い肖像画というものはいつ見ても、劇化された伝記というか、あるいはむしろ人間に内在する自然のドラマとでも言った方がよいもののように思える」[17]と。ポントルモ、ドガからドーミエを経てピカソに至るまで、カソボンからベンヤマン・コンスタンを経てカフカに至るのと同じような「しだいに化粧を落としていく」人間学へ向かう意志が張り渡されている。しかし、それぞれ異なった仕方で人間の本質を新しく直接に表現しようと試みているこの二つの領域には、やはりまた非常に古代ローマ的な伝統の影響がうかがえる。皇帝の偉業報告と古代ローマの道徳心理学的作家たちの観察が、ヨーロッパの日記学に対し様々な刺激を与えたのと同じように、古代ローマの性格学的リアリスティックな肖像画は近世のヨーロッパ人の肖像画に刺激を与えたのであった。[18]

我々は日記の一つの新しい根本モティーフに近づいている。想像的行為による、控え目に言えば芸術、文学、音楽、科学研究も含めてきつい毎日の仕事（ターゲスアルバイト）による矛盾多い現存在（ダーザイン）の克服である。この「創造の」問題に次章を当てるつもりであるが、その際もう一度ポントルモに関心を惹かれる。しかしここでもう、他でもないこの「仕事（アルバイト）」という現象を説明しておこう。これはしばしば内的矛盾に悩む現存在をあっさり「忘れて」しまうための手段とも見做されている。日記におけるこの種の仕事は、それが内心の力を目覚めさせる限り、しばしば心の衛生のための最善の前提とされる。我々はもう既にポントルモの日記から、彼が数人の友人及び彼を最も脅えさせた身体を別として、仕事に、彼がひたむきになった孤独の芸術の仕事に興味を持ったことを知っている。この

「仕事」が――それも不朽を保証するものである必要は全くないが――形成的創造的な忘我によってささやかではあるがしかし幸福なこの世のパラダイスをもたらすのである。

精神及び身体の衛生は生の知識経済学の一つ、幻想とニヒリズムを閉め出す力強い能力の一つである。シャルル・ボードレールの「私日記（ジュルノ・サンティメ）」では「衛生」問題が主題となる。またここでは食餌療法、健康管理法にも事欠かない。「常に我々は時間の観念と時間の感覚に抑圧されている」と、ボードレールは日記断片に「衛生」と「構想」について書く。「この悪夢を逃れる――忘れる手段は娯楽と仕事の二つしかない。娯楽は我々を消耗させる。仕事は我々を力付ける。どちらかを選ぼう。」それから更になお言う。「貧困、病気、メランコリー、あらゆるものから免れて健康であるためにはただ一つ、勤労意欲（ル・ク・デュ・トラヴァイユ）あるのみ。」[19] ボードレールはこれに更に加えて祈禱を取り上げた。彼は、「わが父のために、マリエッテのために、ポーのために、あらゆる力と正義の集まるところ」である「神に毎日祈りを捧げる」ことを一生涯に渡って「習慣」とすることを誓う。[20]

こうした劇的な衛生構想は、「一方と他方の運命に対する手段」、即ち身体の運命と魂の運命に対する手段の追求の繰り返しである。同様に一八世紀の半ばに至るまでも有名だったペトラルカの書がそう述べている。[21] その第一章には人生の盛りと長寿への希望が扱われている。[22] それには身体と精神の「健康な」生活、人間主義的な融和神学（イレーニク）の処方と示唆が含まれている。瞬間は時間を、時間は一日を運び去り押し流し、一切は不安定で危うく、人間の生なるものは結局のところ無意味であるという事実についての「理性」の歎きを、「喜び」と「希望」がだんだん自身を強めながら反駁していく。ペトラルカは、正しい生き方を教えるために、古代とキリスト教の全道徳心理学的人間形成コスモスに再び陽の光を当てる。しかしながら同時代の人々にも後世の人々にも大きな

印象を残したのは、就中、彼が自然と自然生活の喜びを教えた点にある。[23]

こうして我々は「仕事」と並んで多くの日記家が称える待望の治療法の一つを見出したのである。それは即ち、海辺で、山で、川辺りで、森陰で、あるいはまた自宅の小さな庭の中での、しばしば短時間の、時にはまたほんの数分間の幸福という、ささやかな自然のパラダイスである。ボードレールが「人造パラダイス」と言って、正反対の「サタン的な」ものにひっくり返そうとした「自然」は、後世になって礼賛されるようになったのであるが、この自然礼賛を促したのは周知の通りJ・J・ルソーの「孤独な散歩者の夢想」であって、このことは今日の大衆社会の中でさえまだ忘れられてはいない。第七番目の「散歩」の中でルソーは、改まった口調で、自分は「自然の唯一の法則」に服従し、自然によって――医師の治療と反対に――自分本来の健康を再発見したと告白する。[24] 自然と自然学（植物学）が人間の迫害を忘れさせる。人間の憎悪、人間の侮蔑、人間と人間の自由を求めようとする誠実な努力にもかかわらず人間から受けたあらゆる苦しみを忘れさせる。自然の中には平和の中に住む素朴な人間が見出される。無垢の楽しみをそこで味わい、遂には無風の幸福を体験する。[25] 森、山、海、川、孤島に魂を洗われる。それらから「甘美な酩酊（デリンョウズ・イヴレス）」を受ける。自然の「三世界の調和」はルソーにとっては、それを見る「目と心が飽くことのない」世界の唯一のショーである。[26] 方々散歩して回って彼は健康になる。[27] 彼の自我愛は解放され、隣人愛となり、同時に万物に対する愛となる。アンドレ・ジッドのような人物が称えた「地の糧」が「地上の楽園」を生じさせる。[28] この自然の中でルソーは「恐るべき苦悩」の後、遂に死ぬ運命にある「人間の中で最も幸福な者に」なるのである。

このように単純な幸福をわれらが多くの日記著述家たちは――宗教的内面性、仕事、読書と並べて――人間の

偉大と悲惨の弁証法の中での調整的な緊張緩和の場と成す。自然との結び付き及び、情熱的であると同時に秩序ある精神労働は普遍的な保健衛生の、あらゆる力の均衡経済の主要処方箋と見做される。この貴重な財宝は恋の情熱より上位に、否しばしば家庭の幸福より上位に置かれ、理想としていかなる悪しき時代をも生き延びてきた。それは宗教的彼岸での自我の神秘的没落[29]にも似た、「純粋の」此岸の世界との調和のビジョンである[30]。これまで引用した日記の多くの中にその例を幾つも発見できるであろう。プラーテンは自由をイタリアの神秘的風景フレスコ画に見出す。同様にしばしば保健衛生システムの構想を描くドラクロアは、田舎、とりわけ彼のお気に入りのトゥレーヌに滞在するときにのみ幸せを感じる。G・M・ホプキンズは自然の中に神の暗号を発見する。この種のランクの日記の中では、また雄大な風景描写に出会うことも希ではない。それが短い日記体の文で書きとめられていてさえ、というよりもむしろそうなっているときこそ、その風景描写は素晴らしい[31]。そして小さいながらも自分自身の庭！　地上に舞い下った、わが身独りだけのものであるこの一画のパラダイス！　ゴットフリート・ケラーは、そこで彼が一切のものを「本当に楽しんで心の中へ呑み込む」さまを叙述している[32]。そこでは蝶が聖なる平和の使者となる。年老いて物思いに耽るヘルマン・ヘッセは、庭の片隅、天と地の間の花盛りの中でそうした体験を味わう。恍惚として彼は、舞い飛ぶキベリタテハを目で追う。それは長くて辛い、苦悩が多かったがしかし満たされた創造的人生を過ごした後の幸福な死の到来を告げる使者かも知れない。「ゆっくりと、穏やかな呼吸のリズムに乗って、美しい蝶はビロードの翅を閉じたり開いたりして、六本のか細い脚で私の手の甲に止まり、しばらくしていつ離れたともなく、大気の暑い、白明の輝きの中へフワフワと飛び去った[33]。」

注

(1) 前掲書　2巻　二九ページ以下。傍点は著者。

(2) 同書　一一六ページ。テキスト部にも実例。

(3) ポントルモと彼のヨーロッパのマニエリスムにおける意義については、グスタフ・ホッケ「迷路としての世界」一九ページ以下参照。

(4) ポントルモの「日記（ディアリオ）」は重要な意義を持つものなので、これを殆ど完全に本書のテキスト部に収録した。ということは即ち初めてドイツ語に翻訳した。省略したのは、さなくてさえ頻繁に過ぎて煩わしい毎日の献立についての記入だけである。翻訳に際してはエミリオ・チェッキのイタリア語の原本の新版を使用した（「ヤコポ・ダ・ポントルモの日記」　フィレンツェ　一九五六）。この他ポントルモについての参考文献としては、コルネル・フォン・ファブリツィ「J・ダ・ポントルモの日記」　芸術学文献総合目録　二六巻所収　ベルリン　シュトゥットガルト　一九〇三、バーナード・ベレンソン　「フローレンスの画家の絵」　ロンドン　一九〇三、フレデリック・モーティマー・クラップ　「ヤコポ・ダ・ポントルモ　その生涯と作品」　ニュー・ヘイブン　一九一六、これには「日記（ディアリオ）」の初の英訳が収められている。ジェスタ・ニッコ・ファゾーラ「ポントルモと一五〇〇年代について」フローレンツ　一九四七。一同時代の手になる、疑わしいが彩色のポートレートがジョルジョ・ヴァザーリの「列伝」　フローレンツ　一八八一　六巻　二四五ページに収められている。

(5) 初期マニエリスムにおける「土星人（サルトゥルニカー）」のタイプについてはG・R・ホッケ「迷路としての世界」　一九ページ以下、四〇ページ、一三八ページ、一四四ページ参照。

(6) アミエルと並んで他にも日記作家たちが日常の生理学的な事柄に関するありとあらゆる細かいことをメモしている。ニッコロ・トンマゼーオ（一八〇二―一八七四）、彼の「私日記（ディアリオ・インティモ）」は一八二一―一八五二年に書かれ、一

九三八年から刊行された。テキスト部に実例。――アミエルの日記から大きな薬局を作り上げることができそうな程である。当時の医師の処方箋の興味あるコレクションも作れる。――似たようなことはその他数ある中でもフランツ・クサーファー・クラウスの日記にも見出される。――ルソーには既にこの点からも言及していた。ただ、彼の病気に対する不安は更に遺言にまで影響を及ぼしたことを付け加えておきたい。彼は遺言の中で、自分の死体は、己を苦しめる泌尿器系疾患の真の原因を、他の患者のためにも、確かめることができるように、解剖のため医師に委ねられることを望んでいる。――日記における食餌療法についてはテキスト部のG・M・ホプキンスの実例も参照。

(7) このフレスコ画はアンジェロ・ディ・コジモ・ブロンツィーノによって完成された。一八世紀に壁画は破壊される。ただこの生と死の作品のための図面だけは残存している。

(8) 一六四三年初公刊、ドイツ語版は一九一四年。「ジェロラモ（シェローム）・カルダーノ（カルダン）」はルソーのお気に入りの一人であった。

(9) その一章は「食物と栄養について」である。

(10) ルソーの言葉（「自伝的断片」の中での）を借りれば、カルダーノはモンテーニュよりも確かに「内容がない」が「率直」である。前掲書　一一五〇ページ。

(11) 「ルネサンス及び宗教改革以後の世界観と人間の分析」　ライプツィヒ　ベルリン　一九一四。四三一ページ。

(12) 同書四二九ページ以下。ゲーテはカルダーノを高く評価していた。彼はカルダーノをチェリーニやモンテーニュに比していた。チェリーニの「マニエリスム的な」自伝もここに属する。ディルタイはこれに関連して更に次の人名を挙げている。ルドヴィクス・ヴィベス、ジュリオ・チェーザレ・スカリージェロ、ベルナルディーノ・テレジオ、ジョルダーノ・ブルーノ。同書　四一六ページ以下。

(13) 本章冒頭のラ・ブリュイエールについての所見を想起されたい。

(14) フランソワ一世の「骨董品収蔵室」の管理責任者であったフランシスコ会修道士アンドレ・テヴェは一五八四年「ギリシア、ローマ及び異教国の名士の実像と生涯」という本を著した。

(15) 一六八九年に――ポストゥムで――刊行。

(16) エレーヌ・アデマール「一四・一五・一六世紀のフランスの肖像画」　パリ　一九五一。L・ディミエ「一六世紀のフランスにおける肖像画の歴史」　パリ　一九二四―一九二五。及びジェルマン・バザンの「クルーエからドガに至るフランスの肖像画」（ローマ　一九六二）のカタログの序文を参照。

(17) 「ル・ポルトレ」（「美しい骨董品」Ⅶ）。前掲書八〇七ページ。

(18) ルートヴィヒ・クルティウス「ローマ人の肖像画の骨相学」（一九三一）及び「現代世界に置ける古代芸術」（一九五三）参照。「トルソー。散在する遺稿集。」ヨアヒス・モーラス選・編　所収。シュトゥットガルト　一九五七六八ページ以下、及び四三ページ以下。

(19) 「作品」一二三四ページ。なおまた経済上の不安、慢性的金欠の悲惨に関して言えば、それらが他ならぬ詩人、作家、芸術家の多くの日記の中で再三再四一つの役割を演じているのは当然と思える。収入と支出の問題はしばしばやけっぱち気味な金銭出納控えの書き込みによって日記に登録される。その好例はこれまたポントルモの日記にも見られる。有益な参考となるのはここでもまた（ルソー以外では）コンスタン、ドラクロア、アミエルである。ジッドは――財政の点では――貧困の憂いよりもむしろ自己自身の貧欲を恥じる気持ちと戦っている。特に一九世紀の青春日記には幾ダースもの「貧しい若人のロマンス」（ロマン・ダン・ジュノム・ポーヴル）や「失われた幻想」（イリュスィオン・ペルデュ）がある。テキスト部のニーチェの実例及び（日記の「金銭出納簿」について）デューラーの実例も参照のこと。

(20) 前掲書　一二三七ページ。日記における「祈禱」についてはテキスト部のキルケゴールの実例を参照のこと。

(21) 「吉凶両運の対策について」　一三五四―一三六六執筆。この書はM・ド・モンテーニュからG. Chr. リヒテンベ

ルク、A・ショーペンハウアーを経てアンドレ・ジッドに至る「栄養の」道徳心理学の先駆と見做される。ヘレニズムにおける衛生処方（エーリウス・アリスティーデス）に関しては既に述べた。第Ⅱ章参照。

(22) 前掲書　六〇五ページ以下。

(23) ペトラルカはまた周知の通り、自然美と個人的自然体験の発見者とも見做されている。

(24) 前掲書　一〇六五ページ。

(25) 同書　一〇七三ページ。

(26) 同書　一〇六二ページ。

(27) 同書　一三〇七ページ。

(28) ルソーの言葉。「第八の散歩」参照。前掲書　一〇八三ページ。

(29) これについて詳細は第Ⅹ章。

(30) これについて詳細は第Ⅸ章。

(31) テキスト部に収めたホプキンズの日記の実例を参照のこと。更にまた、素晴らしい模範がとりわけライナー・マリーア・リルケ、エルンスト・バルラッハ、ルネ・シッケレ、ヴィルヘルム・レーマン、エルンスト・ユンガー、カール・オイゲン・ガスの日記に見られる。

(32) テキスト部参照。

(33) 「省察と書簡集」　フランクフルト／M　一九五七　（全集七巻）　九四五ページ。

（付　記）

前節（「経済研究」第一〇〇号、第一〇一号所収）に引き続き、此節でもテキスト本文及び注の古典・ロマン語系の固有

名詞のカナ表記と書名などについて、経済学部岩本修巳教授、文芸学部長神　悟講師から有益な助言乃至指示を仰いだ。両氏の御好意に改めてここに感謝の意を表したい。

なお、今回の翻訳に際しても前節同様昭和六十二年度成城大学特別研究助成費によって購入した参考文献を使用したことを付記しておく。